



遠く宿縁を慶べ

たゆまざるお育ての中で

お念仏する者は、阿弥陀仏のおはからいで、お浄土に往生します。そうしたら、仏と同じになりますから、仏の仕事をします。お浄土を知らない者に、お浄土を教え、そこへ導く仕事です。そのためには仏の能力をもって、あらゆる姿で、この世に化現します。言葉、人の行為、書籍、物品、動植物に、化現して働きかけます。そのおかげで、あなたは仏教に興味を持ち、この本を読んでいるのです。そのはかり知れない、遠いつながり、受け止めましょう。

仏教関係の本の最初のページに、親鸞聖人を宗祖とする十派の一つ、真宗木辺派錦織寺ご門主が寄せられたお言葉です。あえて真宗用語を用いず伝えようとされています。

* * *

仏の教えは、生活の中に生かされてくるものでなければなりません。「こうでなければならぬ」、「こう言うのが正しい」というのを学ぶだけで終わっては、かえって信心から遠のくと言われるくらいです。伝え育むためには、はかり知れないご縁と、それを感じ取る心がなければなりません。いくら正しい言葉であっても、それだけでは、人に伝わるということが難しいのです。

私も御法座や研修会に招かれてお話しさせていただくことがあります。できるだけ浄土真宗特有の用語を使わないようにと心がけておりますが、最近はお話した後、なんとも言えない寂しさを感じる事が多くなった気がします。それは、話す側と聴く側を隔てる溝、智慧と知識の溝です。私もあなたも「ああ、そうだったなあ…」と共振するご縁、学歴や職業の隔たりなく、先人たちが日暮しの中で自然に育んで下さった思いや心、それを気づかせる「お育て」が失われていることを痛感させられています。

* * *

知識と智慧はまったく違うものです。知識は求めた人のみを得るものですが、智慧はその環境に恵まれた人々すべてに染み入るように育まれます。お念仏のみ教えがお聴聞を肝要とするのは、毎回、初ごと初ごとと聴いて聞いていたことが、ある時「聞かせられていたのはこれだった。私のことだった」と味あわれるものです。それが心からの「おかげさま」のお念仏となるのです。お経も同じです。それは教えられ練習するものではありません。ですから浄土真宗では皆さまとともにお経を誦みます。朝夕のお勤めで、またご法事やお寺の法要で、称えて称えて身につけたものに勝るお経はありません。

「釈迦、弥陀、十方の諸方は、みなおなじ御ころにて、本願念仏の衆生には、影の形に添へるがごとくしてはなれたまはず」とあかせり。しかれば、この信心の人を釈迦如来は、「わが親しき友なり」とよろこびまします。この信心の人を真の仏弟子といへり。

これは親鸞聖人が法難に遭い越後への流罪の後、関東で非僧非俗の生活を送りながらお念仏のみ教えを広められ、晩年は京都に戻られましたが、関東に残った念仏者からの迷いや疑問の手紙に応えて、「お釈迦さま、阿弥陀さま、そして多くの仏さま方はみな、同じところで、念仏の教えに勤しむ人々に、影がその姿につき添うように、いつも離れずいて下さる。そして、このような念仏の信心に生きる人々を、お釈迦さまは「わが親しき友なり」とよろこんで下さる。自分だけ勝ったもの、また特別の道や術はないということを忘れないようにと味われます。

お念仏のみ教えに生きるものはみな同じ共々に仏になることを約束された仲間ですが、またお互いを敬いあう仲間でなければなりません。今、私自身がその気づきとなる多くの仏縁をよろこび、惑わされがちな世間の物差しから離れ、少しでも仏さまの智慧に生きようとする姿が、次世代への宿縁となることでしょう。 合掌

奏庵法座

彼岸会

日時
3月26日(月)
午前11時～

「み仏にいだかれて」

阿弥陀経

法話

ご文章拝読

「恩徳讃」

～*～

おとき

鶯の初鳴きを耳にしたのは、まだうすら寒い日でしたが、鳴き声がしっかり響くにつれて、谷戸にも、乾ききっていた庭にも、色が増してきます。春を迎えるのは、生きとし生けるものが感受する本能的な喜びなのでしょう。

お彼岸という仏縁に先人たちの尊い智慧を想います。

どうぞお参り下さい。



疑問に答える 【過去帳って何?】

NHKの「ファミリーヒストリー」を観ている、我が家のルーツを知らない人が多いのがわかります。このルーツ調べの助けになるのが過去帳です。

過去帳は、先祖の記録を亡くなった日順に記したもので、故人の法名、俗名、死亡年月日、享年が記され、その他に両親の名や続柄などが書き入れられていることもあります。

浄土真宗の礼拝の対象は阿弥陀如来であり、ご先祖のお位牌に手を合わせる教えではありません。

過去帳はご先祖と今を生を繋ぐ記録帳ですから、ご縁のある親族を記入されることもあります。

お寺の過去帳を第三者にお見せすることは禁じられており、いたしません、それぞれのご家庭ではなき人の思い出とともに記録帳としてお仏壇に備えられています。

御礼

今年もお彼岸の19日、龍溪寺奏庵・春季永代経法要をお勧めさせていただきました。

久しぶりの顔も揃い、ご姉妹で、またお孫さん連れで、お参りもいただき、ご法要懇志、お供えなどお送りいただきましたこと、併せて御礼申し上げます。ありがとうございました。

合掌

先月書いた、もう送ろう(死を迎えさせよう)と保護した猫が少しずつ生きる方向に向かっている。脊椎に障害を持って寝付いたその姿から、清々しい死を受け入れたようだと思うのは、勝手に感情移入だったと気づかせる。■無理やり口を開かせせ流動食や水を与えて一ヶ月が過ぎ、もしやとその口に好きだったフードをもっていったらカリカリと食べ出し、スポイドで苦労して与えていた水も自分で飲み出した。「こんな状態で生きたくはないだろう。もう弱っているから…」は、時に生きる本能を無視した、その姿を見て感じる側の傲慢かも知れない。かける言葉やしてやることに言葉では返せぬ猫に、いつか来るであろう、思いを伝えられなくなって介護されるままの自分の姿を重ねる。■末期医療の病院で、「最後にしたいことは何ですか」と聞くと、多いのが「タバコを吸いたい」だそうだ。医療施設での喫煙は厳しく禁じられている。タバコを吸わせてあげようとしたら、弱った人を病院の外へ連れ出さなければならない。その外も禁煙場所だらけだ。せめて死ぬ前くらい思いの通りにさせてやりたいと願っても完全に叶えられないのだから、思う通りにしてやったから悔いはないというより、どこかに悔いる気持ちがあってこそ家族の情かもしれない。■病院死は自分の美学にあらず「自我死」を選ぶと実行した評論家の死も、他の力を借りたのではないかという疑いがもたれ、安楽死したいという脚本家女史も、自分で最後の薬物を飲むのは嫌だ、わからぬ間にやってほしいと公言する。それは一番身近にいた人を犯罪者にするかもしれない一番迷惑な死だろう。■生きようと思っても生きられず、死のうと思ってても死ねない、その真実だけは変わらない。死に方にこだわる人は、それが生き方の現れだからと言うが、思うようにならない人生の締めくくりが死であり、されるままを受けて終えていくすべての姿を尊いものと味わってきたことに嘘はないが、願わくば自分のそのときの姿が傍目には穏やかであってほしいと思う自分がある。

Norimaru